
マジキチなオレが世界を救うワケが無い

うおると

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジキチなオレが世界を救うワケが無い

【Nコード】

N7308N

【作者名】

うおると

【あらすじ】

全ては神の御心のままに と、『オレ』は世界を滅ぼした。比喩でも冗談でも無くマジで。100億人くらいの人類は死滅し、その他の動物や植物、ついでに魔物も滅んだ。

さあ、それじゃあお待ちかねの報酬を と思ったなら神様クライアントが衝撃的な一言を！？

オレ：oi

オレ：misu

オレ：おい

オレ：紀伊店のか

オレ：詐欺とかマジ死ねよ。

マジキチな『オレ』が送る、愉快でも、痛快でもない、残念な妄想異世界召喚ダークファンタジー。

*この小説は主に作者の自己満足で出来ています。更新は不定期です。『異世界』『最強』『チート』嫌いな方はご遠慮ください。

プロローグ：煉獄召喚 世界の破滅

目の前の全てが燃える、焼ける、灼ける。

人も、家も、地面も、空気も、何もかもが燃える。

先程までここは都市だった。この国で一番と言いつけるほどの大都市。最先端の防衛機構を備え、最大数の軍隊と『勇者』が守る都市。

「なのに、このザマだ……どう言い訳するのさ、勇者様？」
「つく！」

オレの目の前にいる男は歯噛みしながらこつちを睨んでくる。

でも、ただそれだけ。初撃で足を一本、追撃で両腕を炭化させたから立ち上がれるはずもない。

案の定、勇者は灼熱の地面に這い蹲りながら叫ぶ。

普通、そこまでヤラれたらショック死するか気絶しそうなものだけだね。

「よくも……よくも皆をつ！」

「悲しいけど、これ戦争なのよね……なーんて」

「貴様　ぐつ　ぐつ……！！」

少しからかってみると面白いくらい激昂する。でも空気すらかなりの熱量なのに本当によく吼えるわ。

勇者の正体は結局わからなかったけど……案外サイボーグだったりしてね。

「ごめんごめん。でも本当のことでしょ？　戦争だし殺すのは当然。一般市民とか街もまとめてなのは……なんて言ってたかな、確かゴ

「掃除がどうのって」

「ッ！ ライトニングブリッツ！」

「おっと」

オレは一応避けようとしたが、流石に光の速さで迫る雷撃は避けられないよ。直撃した。

かなり痛いし手足が痺れる。心臓も 数秒止まったけど問題無いみたいだ。

「う、あー……この程度？」

「バケモノめ……」

バケモノ扱いか。一応人間だし憤慨する場面かな？

「やつべ。今の一言のほうがさっきの電撃より痛かったかもしれん」

「はあ……はあ……」

勇者様は息が上がってらっしゃる様子。そんなにやってると喉が先に死ぬぞー。

「はあ……何故だ！？」

「え？」

まだ元気なのか……驚いた。

「何故、帝国に与する！ 戦争は終わるはずだった！ 帝国は無茶な侵略を止め、世界は仮初といえど平和を手に入れるはずだった」
「平和ねえ……」

背中がむずむずしてきた。なにこれ、説得したいの？

「貴様さえ……貴様さえ現れなければ！」

「あのさ……ぶっちゃけていい？」

「何を」

いいよね、言っちゃって。クライマックスだし。こう、悪役が真相をポツリポツリと語ってナ、ナンダッターみたいな展開。

「そんな関係無いんだわ。帝国とか平和とかさ」

「なっ……」

「帝国がさ、一番効率よかったんだわ」

あ、勇者の頭の上に？マークが一杯浮いてる。そりゃそうか。

「オレの目的ってのはさ、世界を滅ぼすことだよ」

「……………」

な、なんだってー！ って言われたかったなあ……残念。

「その手段として帝国の尖兵としてへーこら働いてたワケですよ。いや、これで終りだと思つと胸がすくよ」

「どういふ」

「オレの能力は『異世界召喚』。読んで字の如く、異なる世界を召喚することが出来る」

オレは大袈裟な動作で腕を広げながら辺りを見回す。目に入るのは見慣れた灼熱地獄。

「ただまあこの能力。ご存知の通り、範囲は広くて十数km……頑張れば数十kmいける程度なんだよ。普通なら十分だが、世界を

ってか人類を滅ぼすにはちよいと足りない。足りなさすぎる」

あれ、勇者様の反応が無い……あ、でも目が動いてるし生きてはいるか。オツケー頑張れ勇者様！

「そ・こ・で！ とりあえずある程度この『煉獄』 ああ、この異世界のことね。を馴染ませておいて放置しておくってわけですよ。後は」

言葉を切ってパチンと指を鳴らす。

予定では拳大の炎がボツと燃え上がるはずだったけど、タイミング良くどこか遠くで爆音が轟きキノコ雲が上がる。

やべー。今のオレ、すっごい悪役みたいに見えてない？

カメラがこの熱に耐えれば良い絵が取れたのになー。

「同時に『召喚』してやるっと。召喚する前の弊害といえは多少気温が上がる程度だしね、まず一番広大な土地を持つ帝国を終わらせる。後は帝国の侵略に合わせて俺も他国に移動。侵略と異世界の設置をするっていう地味ーなことやってたわけだ。これが帝国に ついた理由かな。……何か質問ある？」

オレがさらっと説明してやると、勇者は口をパクパクさせるだけで声が出ない。

終りかなーと勝手に思っていると、ぼそぼそと何かつぶやく。

「……ぜ……を……す？」

聞こえません。もっと大きな声でよろしくお願いします。

「なぜ……せか……を……ぼす？」

埒があかん。近づいてやるかな。

オレはまだ若干痺れが残る足を動かして勇者に近づく。大体5m
くらいの位置でちゃんと聞き取れた。

「何故……世界を……滅ぼす？」

あー、そこになりますか。そういや言ってなかったね。それは
な……

「全ては神の御心のままに……ってヤツかな」

「そうか………おおおおおおおおお！！！！」

って嘘！？ ちよっ……足動くはず無いっしょ。勇者補正か！？
チートか！？

「エクスカリバー！」

あ、エクスカリバーって実物の剣じゃなくて魔法なんですね。え、
もしかしてやばい？

かなり接近してたのが災いして勇者の手に生まれた光の剣 エ
クスカリバーが急速に胸へと迫る。

お、おー？ 死ぬんじゃないコレ。なんたって伝説の聖剣エクスカ
リバーですしね。

「はあっ……はあっ……はあっ……！！」

オレの体をかなりの勢いで剣が貫通する。骨も内蔵も見事に真っ
二つ。いてえ。

「貴様は……生まれてくるべきでは……無かった」
「ぐは……ま……うつつ」

ちよつと待ってくれ勇者様。なんでまた剣に力込めるの？ 斬るの？ オーバーキルなの！？

「うおおおおおおお！……！」

[illegible]

勇者の剣は心臓の辺りからまっすぐに急降下。

まるで豆腐を斬るかのように滑らかにオレの体を斬り裂きやがった……ちくしょうめ。

「やったよ……セリーヌ……ヴァイン……」

誰よそれ。クソ、油断した。最後にやられるラスボスの気持ちがよく分かった。

満足そうな顔しやがって……その綺麗な顔を
絶望に染めてやるよ。

体内に『逆行世界』を召喚！ 瞬時に傷を修復して体勢を立て直す。

「な……！？」

痛い。とんでもなく痛い。傷は治ったはずなのにまだ斬られてる感じが残ってる。

オレはもう足に力を籠めることのできない勇者の襟首を掴んで持ち上げる。

その顔には火傷と幾つかの傷があるが、元々の美形が損なわれることは無い。

だが、表情は完全に絶望しきっている。光の剣は既に消えているし、本当に奥の手だったのだろう。

あーあ。良い気味だよ。自然と顔がにやけてくる。

「ねえねえ、今どんな気持ち？」

「あ……」

「勇者様程度で、このオレを殺せると思ったの？ バカなの？ 死ぬの！？」

本当に悪役の気持ちが分かる。今のオレなら自然に高笑いが出る。

「まあ 死ぬのはお前だけじゃないからさ」

皆一緒なら怖くないってね。

「待……て……」

「じゃあな。来世は学生でもやって暮らせよ。残念な勇者様」

「あ、あ、ああああああああああ！！！！！！」

召喚。世界を『煉獄』が覆い尽くす。その僅か数分後 世界は滅びた。

プロローグ：仕事の出来ない神様

ああ、この長ったるい廊下を歩くのもこれで最後かー。長かったな。

オレは延々と続く真っ白な廊下を進む。

この先に在るのはこの世界を創った神がいる場所。

クライアントであるそいつに会うために、まっすぐに歩いていく。まあ一本道なんですけどね。

ようやくついた。ここまで来るのに一瞬だった気も、途方も無い時間が立った気もする。

「ようお神様。ミッションコンプリートですよっと」

オレは何の遠慮もなく真っ白の扉を押し開く。

真っ白の壁に真っ白の床。机も椅子も調度品も ついでに言えばこの部屋の主も白だ。

「……随分と、仕事が早いね」

白い髪に白い瞳の少女。白い肌に白いローブと……相変わらず白白白。

自分は潔白ですよアピールしたいのかもしれない。

まあ、ちつこくて可愛いからいいか。ジャステイスですよ、ジャステイス！

「仕事は正確で、楽に、早くやるのが一番だ。設置には手間が必要だったが、邪魔する存在なんてそうそう無かったしちよるいもんさ」
「君が目覚めてから約43年 人類の、いや、生物の歴史を白紙に戻すのには少々短すぎるね」

そんなに経ってたのか。そっぴゃ時間なんて全く気にして無かったしな。

「そう、早過ぎる。私は 君がどんなに頑張っても数百年、ないし千年はかかると思っていた」

「見くびるなつてことさ。人間やるときゃやるつてね」

火事場の馬鹿力。背水の陣。上げればキリないんじゃないの？

「そして、私が君に支払う対価 報酬についてだが」

待ってました！ オレはようやくこの最低最悪の

「結論から言おう 無理だ」

……………は？

「君が先刻倒した勇者。アレは私が用意した者だ」

「っ……………どういつ自作自演だよ」

あーやばい、キレそう。何で！？ お前はオレに世界を滅ぼしたいつて言つたよな？

その対価に報酬 オレの望みを叶えてくれるつて……。

「当初のシナリオではこうだ。君は私の依頼を受けて世界の破滅を進めて行くが、人類には『勇者』という守護者がいた。君は勇者の圧倒的な力に負けるが諦めず、各国の戦争を助長する形で破滅を押し進めてゆく。さらに、勇者は人間ゆえ代替わりする。寿命はもはや存在しない君が、千年後に最終決戦を仕掛けても対応出来ていた

はずだ。最終的に君は勇者に勝利するが、致命傷まではいかずとも重傷くらいにはなるはずだった。」

「後はボロ雑巾のオレと数の減った人間つーか生物を掃除して完了ってわけか」

神様は無表情でコクリと頷く。可愛らしい動作だが、今のオレには奇立ちしか湧いてこない。

「オレの能力は知ってたよな？ 何であの程度で勝てるなんて思ったよ」

「そもそも、君が異常すぎるのだ。あの『煉獄』を世界規模で召喚、維持することが出来るなんて」

「おい 寝言言ってんじゃねえぞクソガキ」

無理だ。耐えられない。何コイツ？ ふざけ過ぎだろ。

神様は依然として無表情のまま椅子から下りてオレと対峙する。

「いつごろ無理だって気づいた」

「……君が最初の勇者と接触した時からだ」

「ああ、適当に転がして周りの奴らだけ殺ったんだっけな。それで？」

「それで、とは……？」

「何で神様は無理だって気づいた時に言わなかったんだ？」

「勇者も代替わりすることに強くなるから、それでなんとか出来る」と

「だとしたら！ 勇者には手を出さなっただけで指示が必要だよな。何でそれを……」

「私は……外界に直接干渉は出来ないから」

呆れた。コイツ本当に神様か？ 神様って言ったらもったいなく何

でも出来て、何でも知ってる、って感じのだと思ってたんだがな。
あ、もしかしてコレってオレのミス？ こんななんちゃって神様の言っ事を信用するからこうなるんですよーってヤツですか。

「はぁ……代案よこせ」

神様の頭の上に？マークが浮かぶ。ハッ……オレが怒りに任せて襲ってくるとも思ったか？ そんなワケが無いだろ。

「オレの存在を消す方法の代案だよ。それくらい考えてるだろうな？」

「……怒ってないのか？」

「残念ながら怒り心頭だ。だが、オレも多少の年月は生きてきた。バケモノと崇められ、兵器として使われる毎日で覚えたのはほんの少しの我慢だ」

「……………」

そんな目で見るなよ。同情なんざ要らないっての……。

「今ココでお前を殺るってのは案外簡単なんだろうさ。きゅっとしてドカーンってな。だけど、たとえオレが無抵抗でも逆は無理なんだろう？」

「……うむ。君の能力は魂に依る力だ。そのままの状態で殺せば、輪廻の輪に捕らわれて転生。その先でまた目覚めるというわけだ。君の人格と、能力そのままにね」

そうかい。オレって自分が思ってた以上にやっかいな代物だったのね。

「代案は 無いわけではない。二つある」

「一つは私の力を使って、この世界に封印するというものだ」

封印、か。だけどそれって……

「……意識とかあったりするのか？」

「……多分、ある」

却下したいところだな。退屈で死ねるし……。

何かの拍子で封印が解けないとも限らないしね。

「もう一つは？」

「もう一つは君を異世界へと転移する」

「……ほう？」

「正直な話、私はコレをやりたくない。結局は君と向こうの人々に丸投げする形だからね」

「だが、封印よりは可能性あるな」

「うむ……君はそこで 自分と同等の魂を持つ存在に殺されるか、相打ちにならなければならない。神でも人でも魔物でもいい。けど、それは魂すら砕く必殺の一撃でなくてはならない」

なるほどね……勇者と死闘。神様の乾坤一擲か。

「しゃーねえ。それに賭けるしかなさそうだな……分かりやすく魔王とか勇者とかいる世界だと楽そうだな」

「言うておくが、どの世界に飛ばされるかはランダムだ」

「本当に神様って微妙な仕事しか出来ないのな」

「……ごめんね」

ってなんか微妙な表情して白い部屋から出ようとしやがる。
まさか逃げるんじゃない……。

「逃げはしないよ。この部屋を私の力で崩壊させる。ここは世界から少し外れた位置にあるから……運がよければすぐどこかに拾われるはずだよ」

ちよつとー転移つてそんな偶発的要素でやるものかよ？
こつ……魔法とか奇跡でなんとかしろや。

「それじゃ……」

「待てよ神様。お前この後どうすんだよ。世界なんてもう再起不能なんだから付いてくるくらいサービスのいいんじゃないの？」

「冗談半分期待半分で声をかけてみるが、神様は首を横に振った。
残念。」

「オーケー。今度はしっかり仕事しろよ。サボってたら喝かれてやるよ」

「ああ、よろしく頼むよ」

あらら……あっさりと扉を開いて出て行っちゃった。

つーか殆ど表情動かなかったな。実はロボット……は無いか。

しばらく待っていると、ゴゴゴという音と共に白い部屋のあちこちに亀裂が走る。

壁が剥がれ落ち、次いで床が抜け落ちていく。

待つのも面倒なのでオレは壁が剥がれ落ちて出来た大穴に身を躍らせる。

……何も無い。上も下も右も左も。星のない宇宙空間のような感じだろうか。いや、行ったこと無いけどさ。しかし、案外と快適だ。とりあえず待ってみるかな。すぐに拾われるとは言ってたけど……

…あの残念な神様が言うことだ。信じるのは程々にしておくとしてよ
う。

オレはしばしの休息を取るため、意外と居心地の良いこの空間で
居眠りすることにした。

・
・
・

神様 view

扉を閉めて深呼吸して集中する。そして、予め仕掛けてあった自
室の強制崩壊魔法を発動させた。

「……これで、よし」

崩壊が始まるのは大分後だ。この程度の魔法を動かす力すら全力
で挑まないとかかわない事実には不満が残るが、これ以後やるべき事
など残っていないから何の問題はない。

せめて転移の成功までサポートしたかったが 自身の世界を終
わらせられないほどのこの老体では到底不可能。

「せめて後500年若ければ……。いや、そんなことを言っても仕
様がないか」

既に崩壊を始めていた白い廊下はかなり短くなっている。

少し歩けば端へ着く。眼下には未だに燃え盛り続ける灼熱の世界
『煉獄』とそれに体のほとんどを喰われた私の世界が見える。

決心して虚空に足を踏み出そうとするが、直前に扉へと振り返っ
てしまう。

「ふふ……私は、こんな未練がましい奴だったかな？」

そう、君だけが心残りだ。もしやり直せるのなら……今度こそ君を、私の手で

たった一つの未練を残して。私は『煉獄』へと墜ちていった。

第一話：お姫様と誓いのキス

ゆったりと闇の中で眠っていたオレを急速に引つ張る力が捕らえる。

とは言っても熟睡モードに入っていたオレを起こすにはちと弱い。土日の朝とか、布団から出る気が起きない感じだ。

地面に足がついた感覚がしたが　オレはそのまま眠り続けることにした……。

ルチア姫　view

はあ……　やつぱり、自分の手でやるのは疲れますわ。

今は仕方無いから我慢して差し上げますが……　本当に私自身の手でやる必要があるのかしら？　もう古い儀式法ですからね、改良する必要がありますわね。

そんなことを考えながらも私は手を止めずに儀式用の短剣を振りかぶる。

振り下ろした先には生贄の胸部。脈打ち続けるそこに勢い良く突き刺した。

儀式法の手順に則って順番に切れ込みを入れ、骨を断ち、心臓を抉り取る。

ふむ……　色、艶、魔力濃度。問題有りませんわね。

私は心臓を捧げるように持ち部屋の中央にある魔法陣の上に置く。二十一個目の心臓　これで準備は完了ですわ。

四方の壁、床、天上に描かれた血色の魔法陣を素早くチェックして問題が無いか確認する。

流石は私。^{わたくし}一部の隙もない美しい魔法陣

特に床の主要魔法陣は完璧な出来ですわ！

ああ……この光景を保存することが出来ればいいのに！

「ん、んっ……姫様。そろそろ」

私が自身の作った魔法陣の出来に惚れ惚れしていると後ろから声がかかる。

はぁ……水を差されましたわ。少しくらい空気を読んでくださらないと。

「分かりましたわ。これより勇者召喚の儀を執り行ないます。私が主要魔法陣を担当しますから、あなた方は補助魔法陣をよろしくお願いしますわ。失敗など許されせんわよ」

「ハッ！！」

即座に配置につく。四人の補助術者は四方の壁につくように。私は最も中央に近い円陣の中に陣どる。

「始めますわ」

言葉と同時に目を瞑って集中。

魔力が魔法陣を満たし黒々とした光を漏らし出す。

イメージするのは広大な海。その中に沈む巨大な何かを探る。

………なかなかピンと来るものがありませんわね。

どれも似たり寄ったりな感じで　あら？

伝わるのは他のものより少しだけ大きいその存在。

しかし、その深さは測り知ることが出来ないほど。

まるで　世界がいくつも詰め込まれているような、何とも言いがたい感覚。

ふふっ……貴方に決めましたわ！　さぁ、おいでませ！

それを掴み、引き上げるイメージ。
私が儀式の成功を確信すると同時、魔法陣から溢れる黒い光が部屋中を埋め尽くした。

「お、おお……」

その声は補助術式者が漏らした声だったが、私も同じ気持だった。全てを飲み込んでしまいそうなほど黒々とした漆黒の髪。

この世の一切の汚れを知らないと思われるような造形美の顔。バランスの取れた無駄のない肉体。

さらには見たことのない材料で造られた漆黒の服を着ている。もし神がその存在を知ったならば、手元に置いて片時も離さないとさえ思える。

そしてその存在を私が 支配出来る！

「拘束具を」

「ハ、ハッ！ ここに」

振り返らずに、差し出された拘束具 銀色の首輪を手に取り。震える手で微動だにしない彼の首に取り付ける。

ふふふ……絶対に逃がしませんわ。これで貴方は、私だけの勇者様。

私が感触を確かめるように頬を撫でていると、彼はゆっくりと目を開いた。

ルチア姫 view end

・
・
・

頬を触る感触に目を開くと、そこは石造りの部屋のようにだった。
うわー……なんというか『す、すごい趣味ですね』としか言えない部屋だ。

なにあれ、心臓？ まだビクンビクンしてるんですけど。
というかこの子はいつになったら離れるんだろうか。

それにしても血でべっとりなのに良い笑顔ですねお嬢さん。これなんて猟奇的な彼女？ ヤンデレ？

しかし、それすら霞んで見えるほど美少女だ。
長い金髪に赤のドレス いや、これ元は白か？ とにかく似合っている。

全身血塗れじゃなければ引く手数多だろう。血塗れでもありそうだが。

「q a w s e d r f t g y h h u j a v d f r a d ! f a v e x
s w w l x k g a ?」

……オーケー。まあ待て、時に落ち着けオレ。も、もう一回聞いてみよう。

「…… e a d g e v s c r a ?」

さっぱりわからん。まさか異文化コミュニケーションからは……
…正直覚えるのが面倒だ。

早くも挫折しそうになる。

ああ、昔ジエスチャーで帝国の将校と交渉したときを思い出した。
あの時は本から地道に学んだっけ……。

なんて思っていたら少女が何事かをブツブツと呟く。

それと同時にオレの首元が光が って何で光るよ!?

確かめてみると革でも鉄でもない妙な材質のチョーカーが嵌められているようだ。

わかってねえよ！ くっ……こうなりやジェスチャーでこの異常を知らせるしかっ！

「もう……もう少し落ち着いて待ちなさい。今考えてさしあげますから」

なぜか直立不動とまではいかないが、自然体に体が戻される。え、もしかしてこれ操られてる？

いや、完全に乗っ取られてるってより強制力が働いてるような……。

しかも口調まで変だ。オレはこんな丁寧に受け答えるキャラじゃないのに……。

なんかこう……オレじゃない好青年がオレの声で喋っているような違和感だ。

「……決めましたわ。貴方はこれよりクロードと名乗りなさい！」
「はい。素敵な名前をありがとうございます。ルチア様」

あー……うん。もういいよクロードで。
ってか何で様？

「ふふっ……良い心がけですわクロード。さあ、誓いのキスを
キスとな！？ これはアレか、それなんてエロゲーな展開でいき
なりのマウストゥー……え？

オレの期待、もとい予想を裏切ってオレの体は勝手に膝を折る。
さらに、それに合わせるようにしてルチアが片足を上げる。
ちよつと待て！ この展開は……女王様の『お舐めなさい、この

犬』って感じの！？

あ、ああ！　ちょっと待って。流石に靴にキスするのは初めてっ
ていうか、心の準備がですね？

あ、あ、あ、……アッー！！！！

誓いのキスは血の味しかなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7308n/>

マジキチなオレが世界を救うワケが無い

2010年10月9日19時30分発行